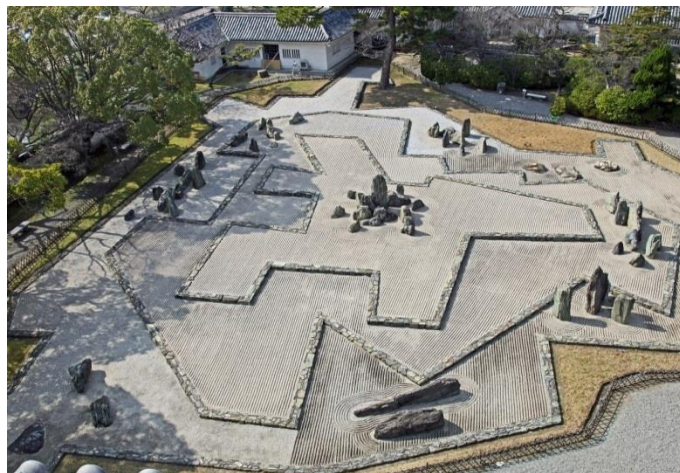


① 漢陽寺「曲水の庭」(周南市): 方丈南庭に曲水のテーマとは前代未聞の庭

重森は白砂の枯山水にしなかったのはこの地を潤した「潮音洞」の水をテーマにすべきと考えた。重森三玲は立石による立体造形を作る際には漠然と石を立てるのではなく、根拠のあるテーマに沿って石組みにした。例えば五山・四神仙島・蓮華八葉・八陣法・二十五菩薩来迎・三十三変化の観音像などである。



東福寺: 四神仙島への立石による造形



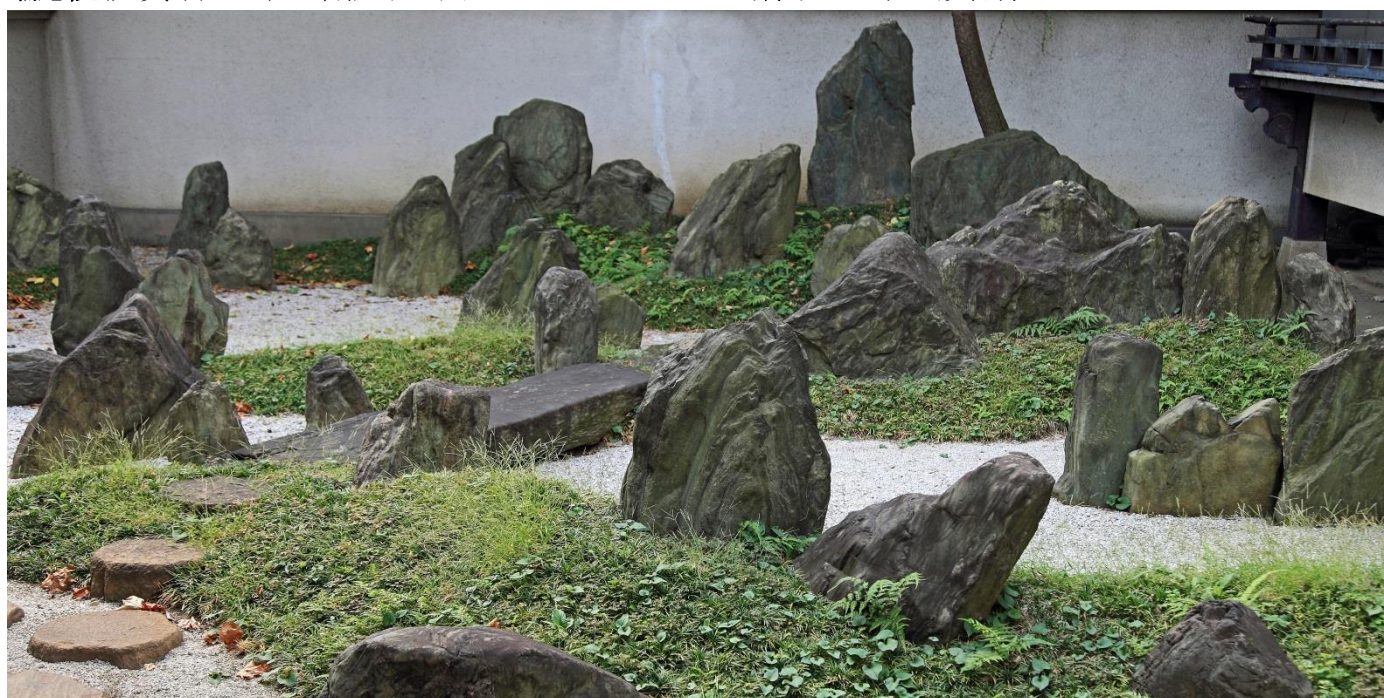
岸和田城: 八陣法



瑞応院(滋賀県): 二十五菩薩来迎図



正眼寺: 三十三観音像



福泉寺(東京都): 「四十八願の庭」

② 漢陽寺「地藏遊戲の庭」(周南市): 重森三玲(S44・73 歳) 四方面面の枯山水の坪庭

重森は当庭の石組みを明日に控えて苦慮していたそうであるが、翌朝ご住職と挨拶を交わした時に「決めた！」と言われたそうである。昨晚どのように思案していたのだろうか。幸い凸字型の石があったので、残る 6 石を中心に向かってやや左に傾けた。すると7石のサークルは一斉に右回りに回転しだしたのだ。まるで北極星を回転する星座のようだ。

重森は庭園史大系の29巻の 73P で『作庭記』から以下の内容を引用している。

『凡石を立つる事は、にくる石一両あれば、をふ石は七八あるへし。たとえば童の、とてうとてうひひくめ、といふたはふれをしたるかことし。』

山の麓や野筋の石は、群犬の伏している様であり、猪の群れの走り散る様であり、また仔牛が母牛に甘えている様である。『作庭記』の世界 森蘊 NHK ブック 69P より引用

四方面面に庭なので考えてみれば円形にすれば、造形上は完成する。しかし単に形を作っただけでは意味がない。そこで思いついたのが「地藏遊戲」の物語だろうか。



石の組み方を注意してみると、上記『作庭記』の表現を意識していることが解る。



四方面面の庭

③漢陽寺「蓬萊の庭」(周南市): 重森三玲(S44・73 歳) 蓬萊山とは古く中国の道教思想

島には仙薬金銀財宝長寿延命を求める理想の島に見立てた。蓬萊・方丈・瀛州・壺梁の四神仙島等も云う。



蓬萊の庭: 歩廊越しに臨む。当初は歩廊の位置に「雷雲紋」の竹垣があったが、雲上に蓬萊山を見る仕掛けだ。



旧秀隣寺: 鶴島(右側)と亀島(左側)の中央奥に蓬萊山を望む。典型的な鶴亀蓬萊の庭。

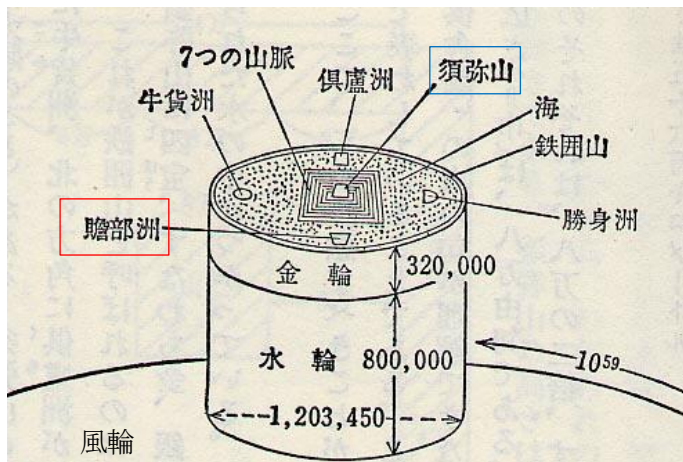


金地院: 小堀遠州の傑作で鶴島(右側)と亀島(左側)の中央奥に蓬萊山を望む。

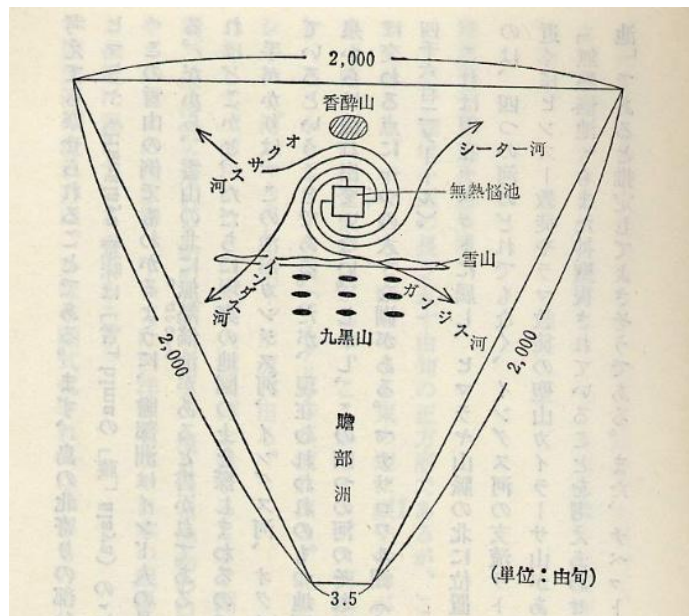
④ 漢陽寺「九山八海の庭」(周南市): 仏教思想の壮大な宇宙観を視覚化した造形

須弥山と周辺八石で九山を、潮音洞の豊富な水を八海に見立てた。以下にその資料と庭園を紹介する。

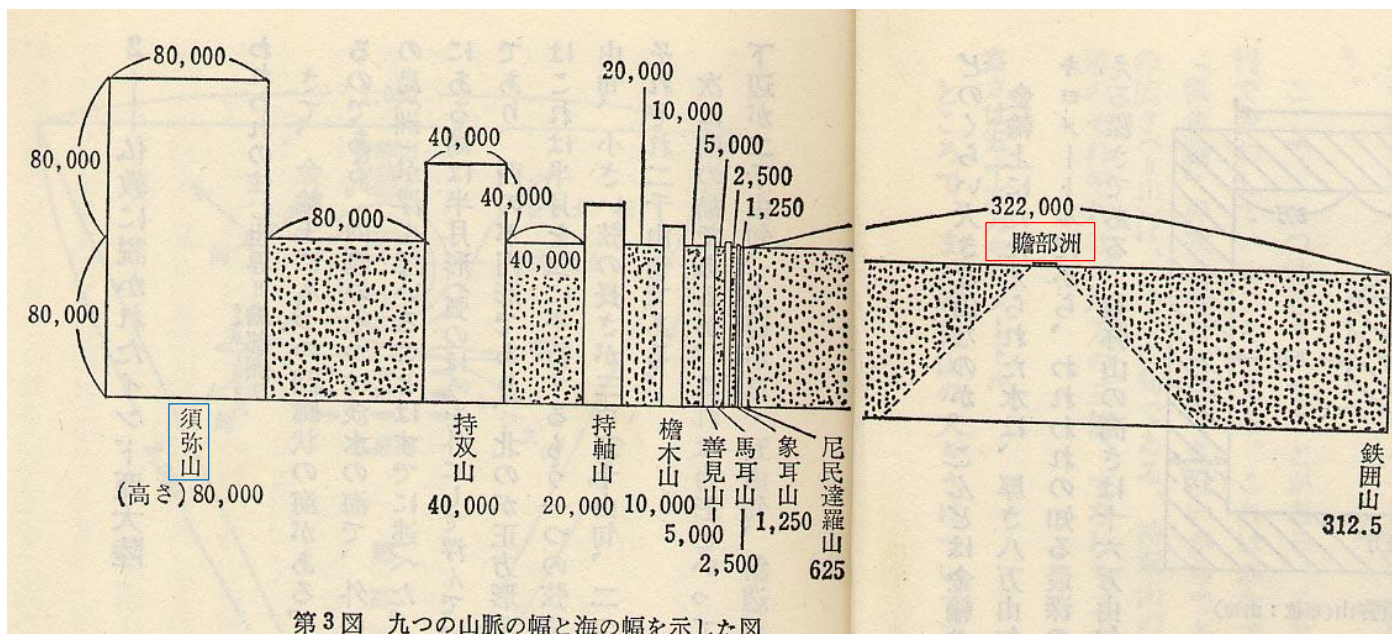
九山八海の構造 (須弥山・瞻部洲など) 『須弥山と極楽』 定方晟 講談社現代新書より引用
インド五世紀の仏僧ヴァスバンドウの「俱舍論(くしゃろん)」による転生輪廻の世界論では九山八海をおおよそ次のように述べている。



金輪際の上には中央に聳え立つのが須弥山で、その周りを七重の山脈が四角く取り巻いている。更にその外側にはリング状の山脈が取り巻いている。あわせて九山である。その山脈の間には海があり、あわせて八海である。



瞻部洲はインド大陸を表している。北部にある香水山がありそこには様々な香りのする樹木が茂っている、と言われている。現実の山はカイラーサ山に相当する。



須弥山を取り巻く八つの山脈と八つ海の断面図

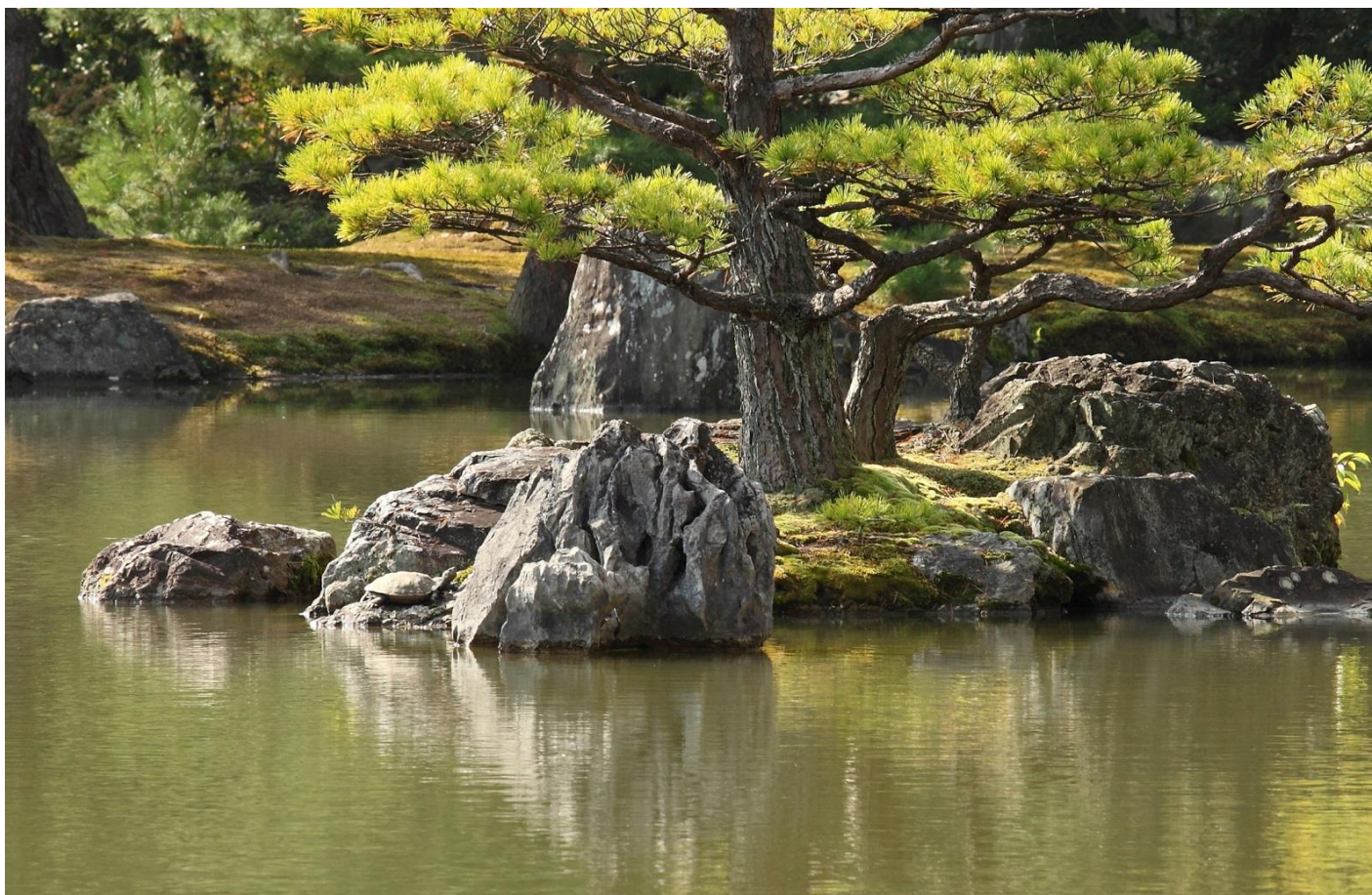
①同心方形の金の山脈が七つあり、それを内側から列記すると:

持双山・持軸山・檀木山(えんぼく)・善見山・馬耳山・象耳山・尼民達羅山(にみんだつら)

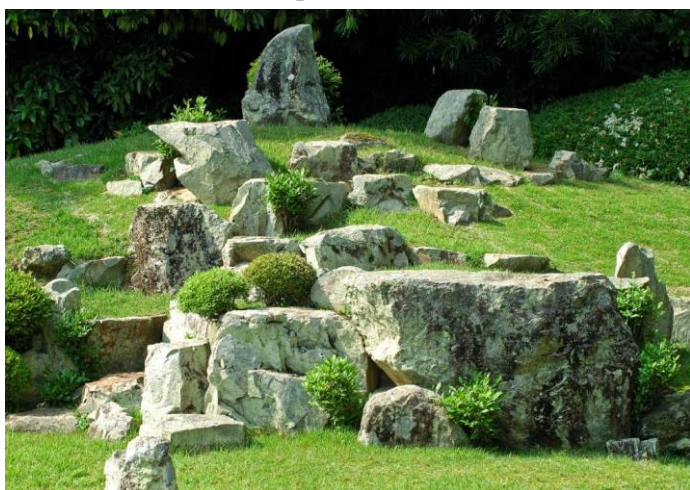
②最も外側の山脈は鉄からできた環状の山脈:鉄圀山(てっちせん)がある

③各山脈の間には海がある

④外側の山脈の尼民達羅山(にみんだつら)と鉄圀山(てっちせん)の間の海には四つの島があり、東には半月形の勝身洲(しょうしんしゅう)、南には台形の瞻部洲(せんぶしゅう)またの名を閻浮堤(えんぶだい)、西には円形の牛貨洲(ごかしゅう)、北には方形の俱盧洲(くるしゅう)がある。



金閣寺の「九山八海石」



萬福寺(島根県益田市):雪舟伝承の庭
築山頂上の造形は須弥山を象徴か



靈雲院(東福寺):細川光尚から送られた「遺愛石」と
名付けられた九山八海石と須弥台と石舟



北畠神社:中央が須弥山か

⑤ 漢陽寺「蕭湘八景の庭」: 重森三玲の東福寺(S14)に始まる色彩と幾何学模様の思い

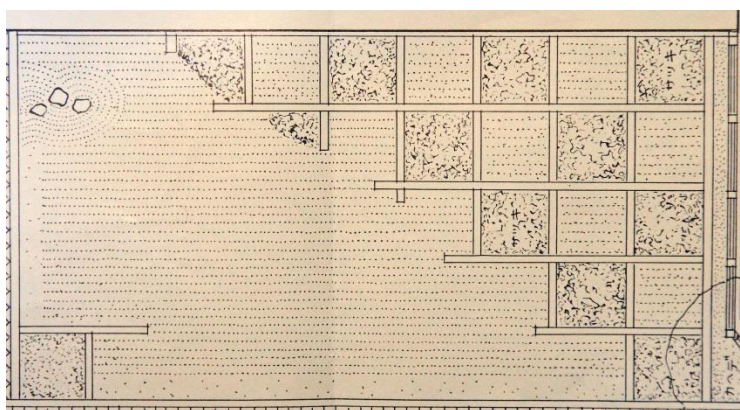
願いは 34 年後に当寺に結実し、さらに昭和 50 年福智院に受け継がれた。(参照⑧東福寺)



書院よりの景



東福寺方丈西庭(S14)のモダンさに驚く



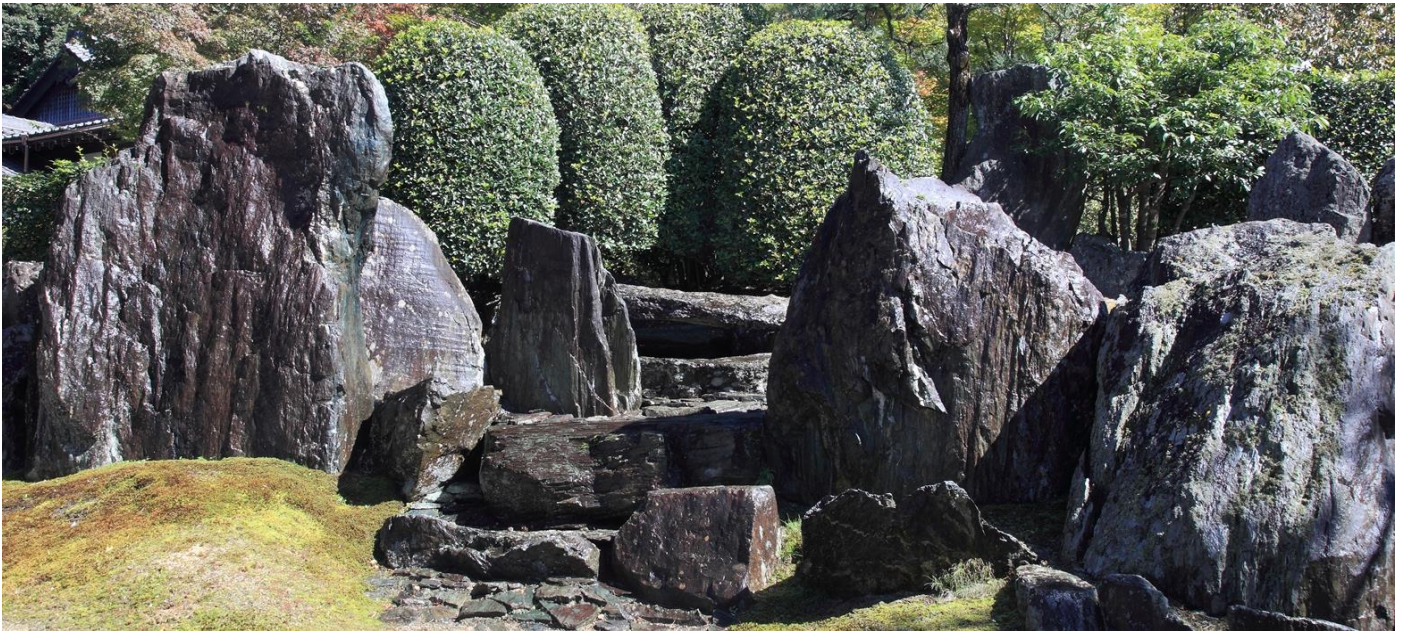
同左設計図



福智院「愛染庭」(S50)のデザインは本堂に向かって左右に「古来の石組み」と「幾何学模様」の対照の妙

⑥ 漢陽寺「曹源一滴の庭」(周南市): 中国仏教の聖地の滝をテーマとした

隋代に智顗(ちぎ)の意志で作られた国清寺には最澄・円仁・円珍・道元・栄西ほか多数の僧が訪れた。国清寺から 17k m 奥に方広寺と「石梁瀑布」がある。(参照⑩粉河寺)



石橋を中央に見る鶴亀蓬莱の庭。重森は粉河寺の「石梁瀑布」を念頭に置きながら作られたと言われている。



名古屋城二之丸庭園: 有名な「石橋」は方広寺際にある渡に渡れない「石梁瀑布」だ。



粉河寺の「石梁瀑布」



周李常「天台石橋図」・南宋

⑦ 東福寺方丈・南庭(国名勝): 重森を現代枯山水の祖として世界に発信した創作庭園

方丈から見て左側には禅の厳しさ想起させる剛直な石組、一方右は五山を象徴する柔らかな造形を対比。



入口を入るといきなり巨石の森が迫る



立石を強調のため長大な横石を。(㊼金地院の影響)



五山を象徴する柔らかな苔地を切り裂く直線は自然にはない人工のデザインだ。これぞ芸術の庭の原点。



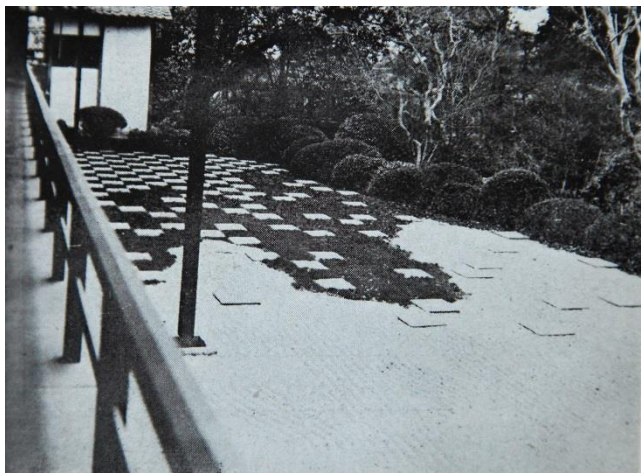
重森は四神仙島(左より方丈・蓬莱・瀛州・壺梁)に石を立てた。具象・象徴造形ではなく抽象造形に昇華

⑧ 東福寺方丈：北庭・西庭・東庭の3庭は総て廃材の利用

東福寺では「禅家では一切のものを捨てぬことが本意」であるとの教えに従い、重森は勅使門の切石・東司の石柱・蔓石などの余材を活かして、新たな造形を創作した。その全てにおいて斬新な造形はヨーロッパ抽象主義のデザインにも通じる世界基準にそぐう芸術作品である。



一般的には碁盤目の造形として親しまれているが、実際は下の写真のような洲浜模様だ



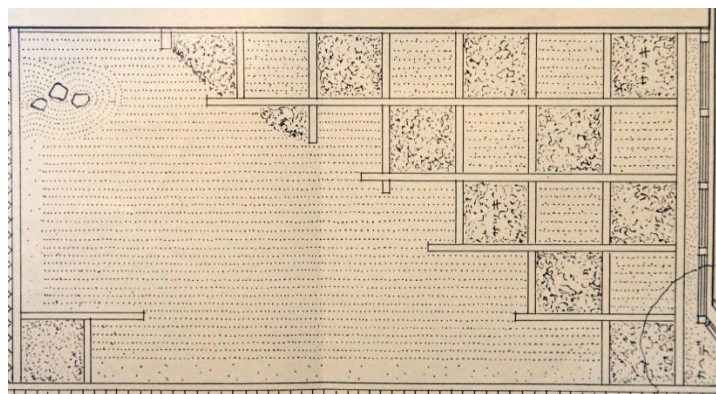
昭和 17 年の写真(S14 完成)

左記の写真は【『庭の美』 重森三玲著 第一芸文社（昭和 17 年発行）】

「…色彩だけとして鑑賞する場合がある。前二者は普通従来とてもザラに用いられてきたことであるが、色彩だけとして用いられた例を識らない。そこで先年私が、東福寺の方丈庭園設計にあたって、西庭に蔓石を入れ、一を白砂に、一をサツキの小刈込とした。これはサツキの花を愛したのではなく、その色だけを愛する行き方であって、井田市松模様としたのであった。ここではサツキを蔓石一ぱいに刈り込むことになっているから、**花のない季節には青と白、花が咲くと赤と白の景観**が出来るのである。色だけの対象を作意に入れたことはちょっと面白い点である。斯様なことも、今後の日本庭園では試みる必要があり、そこに日本庭園の新しい前途がある。」



日本庭園を超えた世界的な造形に昇華



昭和 14 年に作られた当庭の思いは、昭和 48 年に作られた写真⑤漢陽寺庭園で完成する。



東庭は東司(便所)の柱の東石であった石材を活用した。

その形は北斗七星に組まれているが、ここでは重森の好きな立石の造形を強調したアングルの写真を示す。

⑨岸和田城「八陣の庭」(国名勝):大将陣を取り囲む八つの陣は諸葛孔明の八方陣に由来



岸和田城を背景として諸葛孔明の「八陣法」をデザイン化した庭園。



城郭を象ったデザインは近代抽象絵画のように、重森が現代抽象主義の影響を受けていると考える。



近景(鳳陣)より中景(大将陣)・遠景(蛇陣)のぞむ。
回遊しながら連続的に変化する立体造形を鑑賞できる。



前景が龍陣を象り、中景には大将陣と鳥陣が望め、遠景には天陣や虎陣の立体造形が望める。視点をずらすと一瞬で立体造形が変化する絶妙な地割だ。

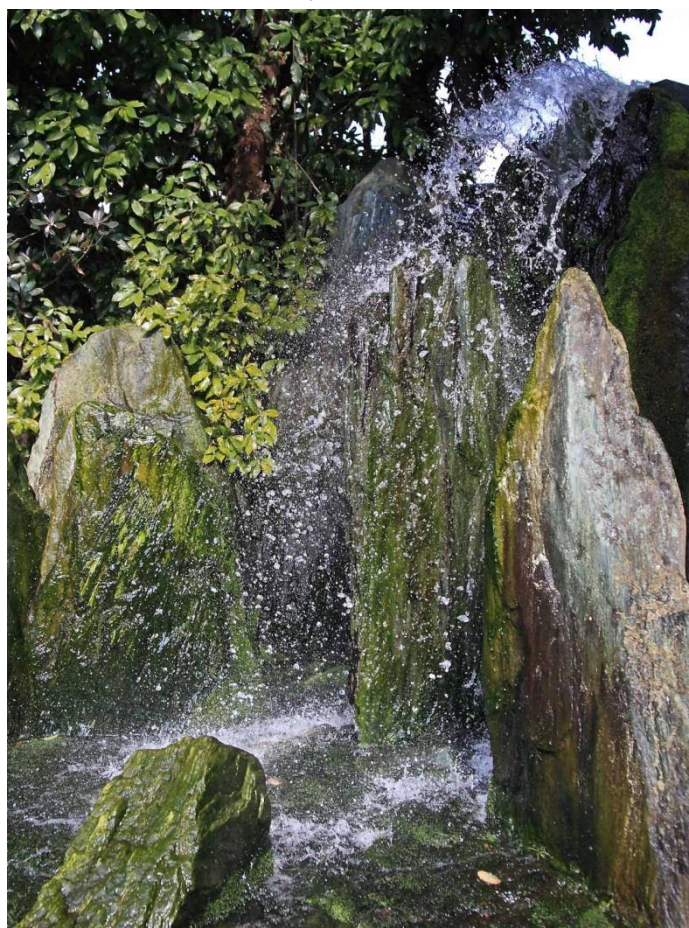
⑩ 松尾大社: 重森の遺作(S50・79歳)に相応しい自由な境地の石組み



平安時代を象徴する「曲水の庭」: 重森の庭は洲浜に始まり洲浜に終わっている。



古代を象徴する「上古の庭」: 松尾の神が鎮座する



鎌倉時代を象徴する「蓬莱の庭」(完成は重森完途)。

⑪ 前垣家(国登録記念物指定): 洲浜模様は個人邸における重森庭園の新規な基準多数

- ①個人庭園での基準となった洲浜模様: 洲浜の造形は錯覚により、書院よりの景観を広く見せる効果。
- ②個性あふれる石を使って有機的な石組は後世の手本になる。
- ③坪庭に作られて抽象庭園は日本庭園を超えた世界基準に適う芸術作品である。



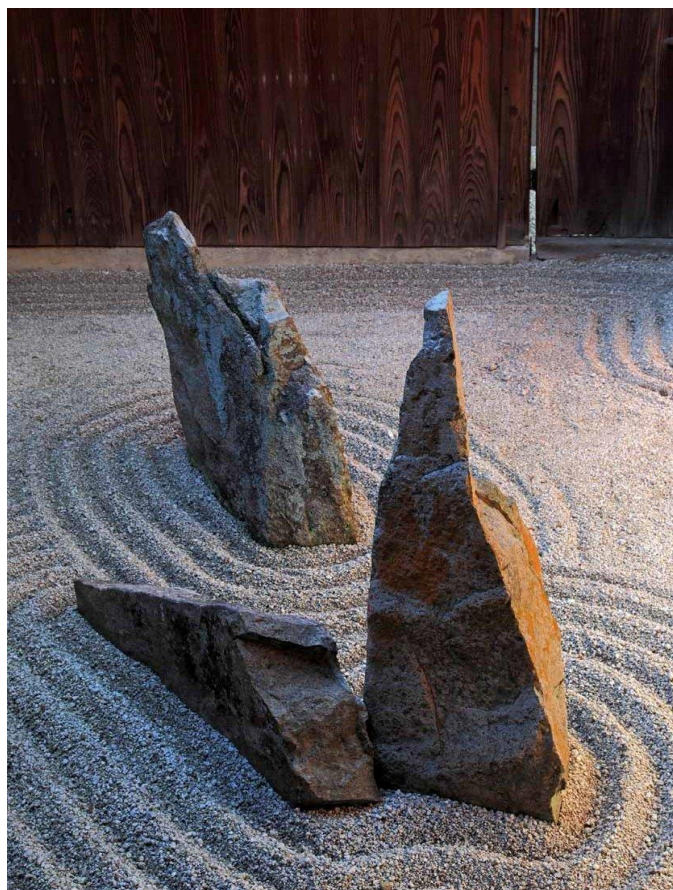
配石の教科書: ①欠損部のある石の選択 ②捨て石の有効活用 ③既存の石との関連性 ④動きの石組



軒下に洲浜をデザインして視線を手前に集中



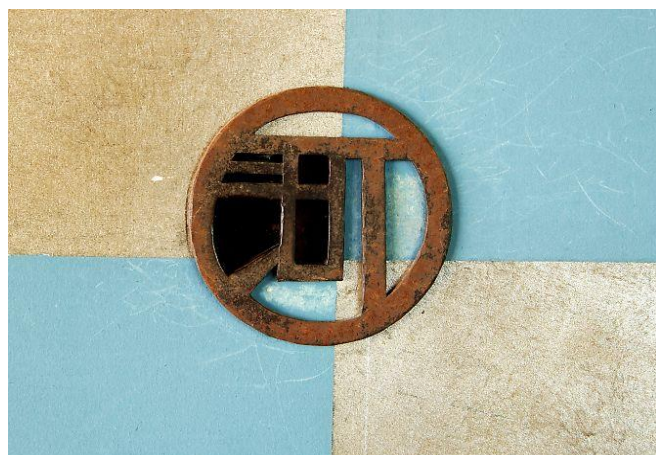
入れ違える出島が庭に奥行きを与える



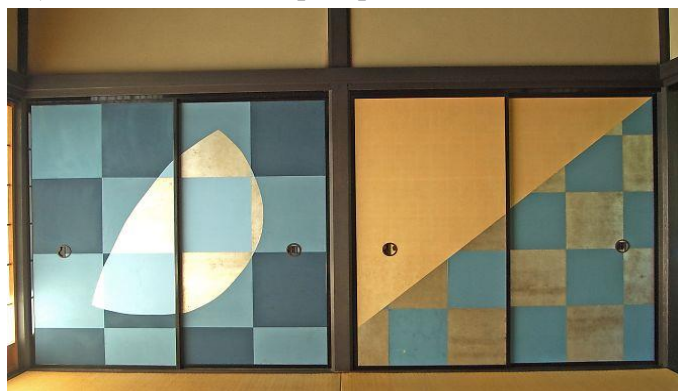
極小の坪庭に僅か3石であるが無限の大きさ

⑫ 小河家(島根県益田市):重森三玲の個人邸における作品の中で最も豪華な庭

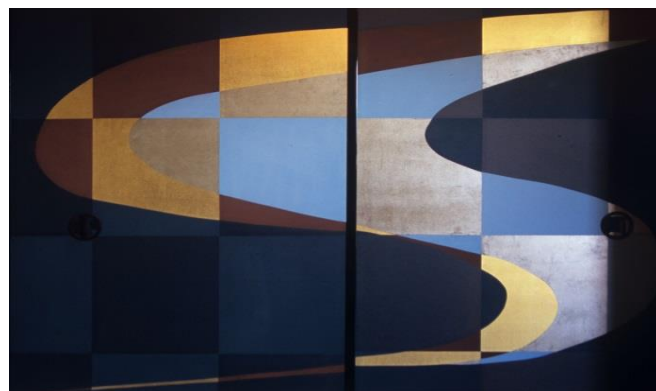
青石の巨石がふんだんに使われた絢爛豪華な庭である。一方インカ風の切石の延段、デザイン化された竹垣、邸宅を取り巻く丹波鞍馬石による洲浜、書院の襖に描かれた襖絵、彫金の引手など繊細な造形。



書院襖の引手には「小」「河」の彫金が施されている



書院襖は半月と市松のデザイン



水屋に面した襖には「市松五彩の流れ」



庭園への道にはインカ風の切石(出隅入隅)による延段と網干模様の竹垣が迎えてくれる。



高く打たれた飛び石と四方仏の手水鉢



斬新な幾何学模様の露地



丹波鞍馬石の洲浜模様



露地と庭園を仕切る竹垣



重森特有の蹲踞背後の鏡石は西芳寺龍湫水にヒント



重森は西芳寺「龍湫水」の鏡石に影響を受けた



絢爛豪華な石組み

⑬ 宗隣寺(宇部市)： 何といっても 7 本の列柱が魅力である

山畔を利用した石組みと横長の池庭があり、池には 7 本の鋭い形の石が 2 列に並んでいる。一般的に夜泊石といわれるが、庭の中心にあるこの特異な造形は蓬莱山から宝物を得るためというよりは、大自然の造化の妙に感動した造形物と考える。この池には水面を上下させる仕掛けは、山口県の長門市にある青海海岸を象徴したのではないか。その理由を『作庭記』より引用する。「国々の名所を思いめぐらして、その面白い所々を自分の考えに取り込んで、大体の姿をその所々になぞらえ、素直に立てるべきである」と記している。



方丈から見た景：山畔と池泉部の護岸に枯滝状の石組みがある。



池中には特異な形状の石があるが、何を表しているか



西芳寺:金剛池にある「夜泊石」とも橋の束とも云える



山口県長門市の青海島

『作庭記』より引用する。

「国々の名所を思いめぐらして、その面白い所々を自分の考えに取り込んで、大体の姿をその所々になぞらえ、素直に立てるべきである」

⑭ 普賢寺(山口県光市):平地に組まれた特異な龍門瀑と轟音響く枯滝

立石と横石の二石の選択眼は細かな細工を超える力がある。4mを超える横石の迫力は自然石の持つ神秘的な力を感じてしまう。右手前にある鯉魚石と合わせて龍門瀑と解釈できる。この庭は細かな石組みによる煩わしさが無く、余白の大きな空間は静かに考えさせる力がある。



広い敷地の奥まったところに巨大な横石・三尊枯滝・鯉魚石がある。石の割れ筋は万丈の滝を象徴しており日本一の枯滝の石である。



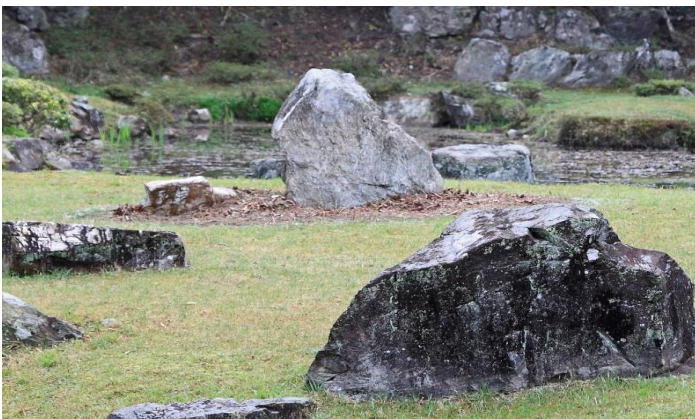
この横石は日本庭園史上最高の造形だ

⑮ 常栄寺(雪舟寺・山口市)：当庭は水墨画の写しと云え、まさに雪舟寺だ

遠近法に基づいた水墨画の三次元化した庭園：近景・中景（オーバーハングの石）・遠景の構成。ここでは、遠近法効果を大きくするための布石、中景のオーバーハングの石の選択、遠景の造形を雪舟の水墨画との関係性を記載する。



①基本構成：このアングルで見ると近景が遠近法効果を生む石組で、中景には異形の石があるが、これは水墨画のオーバーハングの石を象徴している。遠景の山畔の石組は水墨画の煙霧に煙る重畳たる山並みに見える。まさに水墨画の3次元化だ。



②中景にある異形の石は水墨画・中景の巖を象徴



出典)
『日本美術絵画全集』第四卷雪舟集
英社

雪舟筆「山水図」牧松・了菴賛 国宝



③遠景の造形は庭園の最深部の山畔にある十六羅漢石組みで、右記水墨画を反転させた状態だ。



途切れ途切れの山日はやがて見えなくなる
雪舟筆「四季山水図巻」(春部分)防府毛利博物館・国宝

⑩ 常栄寺(山口市):雪舟ならではの緻密な石組み

日本庭園には数ある両門瀑中最も長大で迫力のある龍門瀑石組みがある。さらに鯉魚が龍に化した瞬間の物語を視覚化する造形は難しいが、雪舟ならではの試みで表現した。



龍門瀑の全景：滝は7段 20mあり、池中には鯉魚がいる



7段の滝の5段目以上



鯉魚が飛翔した瞬間に背後の護岸が龍腹に化す



手前より座禅石・十六羅漢石組み・龍門瀑